

## 郷土産業の津軽塗について

佐々木 君 江

### はじめに

私達は、弘前の郷土産業は、「りんごと津軽塗」とよくいう。りんごの方は資料もよく出ているし、私達の身近なものですが、津軽塗の方は、弘前の特産物としてデパートなどに陳列されていて、ただ単に高いものだとかきれいなものだとかいう、郷土産業の津軽塗について、その起源とか、現在に至るまでの過程、又、現状というものを把握してみようとしたものである

### 津軽塗の起源と推移

津軽塗は津軽藩の城下、弘前におこった漆器の総称である。当時は「から塗」（韓塗又は唐塗又は穀塗とも書く）と呼ばれた。

弘前に特色のある「から塗」がぼっ興したのは、津軽諸産業の基礎を築いたといわれる。四代藩主信政が若狭の漆工五右衛門の子、刀鞘師の池田源兵衛を招いて、国産の扶殖を図ったことに始まる。彼は全国諸大名のうち、英邁なる大名士人のうちに教えられていたが、江戸から離れ、東北の最奥地である津軽地方の産業振興をめざし、あらゆる産業の扶殖発展を行ない、経済的に一大飛躍をもたらした。この素材はこの地方の特産である。ひのき材を用い、又漆には当地産の良質の漆を用いて独得の味わいを出すに至った。「津軽塗」の名は明治14年（1881年）10名の士族投資による合資会社、弘前漆器授産会社が才2回内国勸業博覧会に出品の時、特産地を示す名称として用いたのが最初といわれる。塗り方は38回から48回と漆液を塗り重ね、磨き、仕上げまでには40日も要するほど丹精をこめて、作られるから堅牢なことを高尚優美なことは実用工芸品として高く評価されている。その製法と緻密性と堅牢性から、津軽の馬鹿塗として通るようになった。津軽塗は紋砂塗、錦塗、七々子塗、唐塗の四種に分かれているが、近年新感覚をもった、唐塗と七々子塗の模様入が人気を呼んでいる。

津軽塗の生産額をみると、下図のように年々上昇している。

年	生産額(千円)
昭和 29	430.280
32	700.000
35	1,500.000
39	2,164.000

生産額における、津軽塗の全国的位置をみると、昭和13年頃までは、わが国漆器総生産額の0.5%で、26番を占めていた。昭和32年には全国の0.8%で18位を占めている。昭和32年には生産額1%以下というのが19県で53%を占めている。戦前には静岡県が30%近くを占め、圧倒的に他を抜いていたが、戦後、外国市場を全面的に失い、輸出が皆無に等しくなったことによ

り、昭和27年には全国の2.1%、昭和32年には1.0%で16位と急減している。内地向の市場が確立している輪島や会津などにその主導権が移ったのである。津軽塗は著しい発展も衰退もみることなく、今日に至っている。

### 漆器業者の分布

昭和40年8月現在の漆器業者の分布状況を見ると、弘前旧市の西部及び北東部両地区に集中している。中でも新町、15人、西大工町、8人、袋町、8人など西部の方に集中しているもともと漆器工業は弘前城を中心に西部地区に発生したものであり、やがて漸次市内各地区に進出したものである。現在の下新町、西大工町、袋町、平岡町などは塗師町といわれ、多くの塗師が居住していた。

その構成をみると、戦後昭和23年に青森県漆器商工業組合として組合員93名をもって発足したが、現在は上町を中心とした、青森県商工業協同組合(46名)と下町中心の弘前津軽塗販売組合とその他、弘前職工組合の三つに分かれている。これらの組合加入者は162名、その他組合に加入していない人がこれらの2倍位はあるというある組合員の話でした。とにかく津軽塗の実数はなかなかつかめないということでした。

### おわりに

津軽塗工業の零細さには目をみはるものがある。漆器工業はわが国において、古くから行なわれている伝統工業であるが、そのほとんどが零細工業的に行なわれている。

津軽塗の需要が年々多くなってきているということでしたが、今までの技法や販売方法に満足している保守的な面が随所に見られた。わずか、162名の組合加入者の中でもそれが3つに分裂していることも、津軽塗の発展にとっては1つの弊害となっている。市役所とか、工業試験場、組合など協力して、技法や販売方法を改善し、新しい市場を広げようと協力している

### 参考文献

弘前市史

津軽漆器工業の研究 弘前市政調査会

全国特産品案内 日本経済新聞社

日本の在来工業(地理才9巻才12号)